真澄・寺内の足跡

中野　みのる

菅江真澄に興味のある人ならば、真澄のお墓は秋田市寺内大小路の共同墓地（高野山）にあること、寺内を舞台とした日記『水の面影』を書いたことなどは、誰でもが知っている。

しかし、『水の面影』のほかにも、寺内を記録した幾つかの日記を書き、その他の著作の中にも寺内のことが取り上げられていることを知っている人は少ない。特に図絵集仮題『久保田十景』、日記『おがたのつと』については ほとんど知られていない。筆者は、知られていない真澄の足跡を年代順に追ってみた。

一、ひなのひとふし

天明五年（一七八五）七月、三十二歳の真澄が久保田を訪れたことは、良く知られているが、寺内、古四王神社に立ち寄り、「久保田のかうろぎ唄」「古四王の社の神楽唄」を記録していることは以外に知られていない。

文化六年（一八〇九）ころ、真澄がそれまでに直接聞いた諸国の民謡三百ほどをまとめたとされる『ひなのひとふし』の中に前記の二つの唄を収録している。

○おなじくにぶり久保田のかうろぎ唄

吹上沢といふ処より来る女のかたゐら、木の皮の仮面などかけ、鮑貝の鳴子を杖として、是をはうしにつきて、むつきまいはひに田唄をうたふ。ふりことにおもしろし。（天注・阿部家の家士、世の乱を避て山陰にのがれたる。その女子ども世渡るたつきもしらず、夜るよるしのび出てものこひしが、いつとなうかたゐとなりて、その末住

菅江真澄研究

第 51 号

平成 15 年 12 月 30 日

発　行　菅江真澄研究会

秋田市寺内児桜一丁目 5-55

古四王神社社務所内

電　話　018-845-0333

http://w2.amn.ne.jp/~sugae/masumi.html

E-mail:sm4719@mx2.harmonix.ne.jp

振替口座　秋田 02520-6-5018

目　次

真澄・寺内の足跡　中野みのる……1

『久米路の橋』をたどる旅（二）　田村国竹…11

雑誌紹介

『悠久』　鶴岡八幡宮……13

おめでとうございます……14

論文紹介

『菅江真澄の若き日を追う』　白井永二著…15

図書紹介

『おもひつづけたり』　安水稔和著……16

寄付金のお礼……16

新入会員の報告……16

図書紹介

『東北・北海道俳諧史の研究』井上隆明著…17

図書紹介

『真澄墓碑に刻んである長歌』鈴木太吉著…19

真澄往来……21

おらほの真澄……24

総会の報告……24

お悔やみ申し上げます……24

刊 後 録 ……24

める方へ行くに、唐橋或いふ伽羅橋とて、いにしへ沈水香をもて作りしといひつたふ、香の木なれば、俚人香炉木といふ。此橋の名をもてかたゐの名ともはらよべり。尾張の国名古屋のかたゐをさしてげんかいといふ。げんかいとは、その近どなりの御寺を円行寺といふ。その寺の開山を元海阿闍梨といひ、その名高う聞えしが、そこにすむ乞食の名ともはらいふもあやし、かうろぎもはしの名をいひ渡りてさへ年久し

それはめでたや御坐見れば
こがねの銚子、七銚子、
御祝かしげければ
おつぼの松がそよめく
（みちのくふりにやゝ似たり）

笛の中のうぐいす
何をなにと囀る、
ぜにぐらかねぐらこがねぐら、
秋田繁昌とさへつる。

けふの田の田ぬしは、
果報の人とうち見ろ
たわら千俵にこしかけて、
こがねの養歯をくはへけり。

苗もよいば代もよい
植てさかれや小しゅうとめとも、
笠も手膝もいりもせず
はやく世をとりよめになりたや

○亀甲山古四王の社の神楽唄

神世よりみくさのたから伝わりてとよあしはらのあるしとぞなる。
将軍のから石段にこしをかけ参る衆生をまもりつるため。

『ひなのひとふし』に収録された秋田の民謡は前記の二つのほかに、「出羽の国秋田搗臼唄或磨臼或摺唄」「阿仁小阿仁大股小派鳥追」「おなしくにふり秋田の讃引」「おなし郡ふり地蔵尊」「おなしくにふり鹿踊り」「おなし国ぶり秋田山唄」があるが、すべて天明五年に真澄が通過したと推定される土地の唄である。しかも讃引と地蔵尊には『あきたのかりね』にも記したと明記している。ここで紹介した「久保田のかうろぎ唄」と「古四王の社の神楽唄」は間違いなく天明五年に聞いた唄であったと思われる。

二、雪の道奥雪の出羽路

享和元年（一八〇一）十二月中旬、津軽深浦から土崎湊の矢守家、小幡谷家に滞在していた真澄は久保田に移ることになった。橇に乗って出発したようである。日記『雪の道奥雪の出羽路』を紹介したい。

［筆者注・真澄は矢守家を常陸の人と記しているが、矢守家の後裔の方は現存しており、近江の国長浜の浅井長政の家臣であるという。古文書等もあり間違いない］

十二月中旬、土崎を出ると、左手に雪をかぶった丘に大きな石塔がある。これを目印にして船が湊に入るという。

［筆者注・この五輪石は寛永二十一年（一八四四）十月四日、久保田の森九蔵という人が、父母の供養のために、五輪塔を湊に入る船が霧や霞のために船路を迷わないように目印として建て、遠目にそこが目印となったことはたいへん良かったけれども、文化元年（一八〇四）六月四日夜の大地震で有名な象潟の浦も残るところがない程にふりこぼれた時、この五輪石の笠が落ちてこわれたのを、惜しいことに石がといっている内に、また、文化七年（一八一〇）秋九（八）月二十七日、地震のために、男鹿の浦がだめになった時、またこの大五

輪が崩れて、今はただ石の土台だけが残っている。―『水の面影』による。護国神社横の小高い丘にある五輪塔は、森家の菩提寺である當福寺の森家の墓地に温存されていた姉妹塔を模して昭和四十二年九月十六日に復元建立されたものである」

寺内に来た。古四王神社は大きな造りで、しかも、たくさんのお堂がある。この辺りには由緒のある古い物語があるので、再びここに来て詳しく調べてみようと思う。

「筆者注・この思い通り、十一年後の文化九年（一八一二）に鎌田家に滞在し『水の面影』という寺内探訪記を書くことになる」

高清水の古城が栄えたのはいつの世で、城主は誰であったのだろうか、その傍（カタワ）らを、橇で速く通り過ぎた。右手に五百羅漢の堂を建てようとして、今、仮のお堂を建てたところが見える。そこを少林山西来院という。もともとこの寺は、久保田の東側にある松原にあったものをここに移したものである。松原村には万里小路（マデノコウジ）中納言藤房が出家して良雄和尚と名乗り、貞治（一三六三―六八）のころ開いたとされている。藤房の古跡としてところどころに伝えられているのは、すべて史実ではない。しかし、このように都から遠い土地を求めたのもうなずけるところだ。その松原村の跡も訪ねてみたいと思う。

「筆者注・『黒甜瑣語』等によれば、三輪氏と称していた船頭が難船後、能代長慶寺十一世端相教厳大和尚のもとで剃髪し良殿と称し、師の普住と共に補陀寺で修行していたが、なぜか師の勘気を蒙り、雲水となって江戸に上り、五百羅漢造立を発願し、天明元年（一七八一）に公儀から七年間、江戸で托鉢の許可を得て浄財を募り、寛政元年（一七八九）までに羅漢像三百体の造立をみたと伝えられている。この時点で郷里に五百羅漢建立の計画を立てるのであるが、勘気が解けた本師の「能代よりは府下に草創すべし」との助言もあり、時の秋田藩九代藩主佐竹義和の外護を得て、藤倉にあった廃寺同様になっていた西来院の名称を寺内に移し、壮大な羅漢堂―良殿大和尚の描く伽藍は大門、山門、中門、弥陀堂、本堂を直線上に配し、中門左右から翼状の回廊で方丈、客殿が張り出し、弥陀堂と本堂を四角状に回廊で結ぶ壮大なものとして、建立にあたったものである。この藤倉にあった西来院は、南朝の重臣万里小路藤原藤房その人との伝説を持つ補陀寺二世無等良雄禅師閑居の寺であったと伝えられる。

良殿大和尚の伽藍建立にあたり、平安遷都の際、伝教大師が法華経一字一石九百部を敷いたといわれる。―昭和十年代にその一部が出土し、史実を裏付けている。

完成は良殿没後、補陀寺二十九世智光全長大和尚の管理下で文化年間（一八〇四―一八）に完成したとされるが、その実像はさだかではなく、完成直後の文政元年（一八一八）に焼失している」

「筆者注・真澄の著作『花のいではぢ松藤日記』（文政五年＝一八二二頃の作か）の中に、「補陀寺に近づきて門前と云ふ村の三浦氏の家にまづ宿づきて、日も高ければまだ出たつ。田の中路をしはし行ケば、弓手の方タに大黒田といへる田あり。この山田より石工作（インキリタル）大黒天の像掘り出して、とし久しく補陀寺にすゑまつりしが、今は根笹山の西来院に納めて、茂木知教[1]のふみにその来由（ユエヨシ）を記（シル）せり。おのれも『水の面影』にも其事いへり」と記している。

既存の『水の面影』上巻には西来院の話は記されていない。未発見本である『水の面影』下巻に記されているのだろうか。安藤

和風も『秋田の土と人』の中で、西来院の什物の中に「貞和中松原山中より掘出せる大黒天石像等あり」と述べている。

（1）茂木知教（?～文化七年＝一八一〇）
秋田藩士。父は知賢。通称頼母、又蔵、父とともに冷泉前ノ大納言為泰（等覚）の門で、佐竹義和の師。狂歌も詠む。（『秋田人名大辞典』）

昔、古四王の神に御灯明料として寄進された油田という辺りの坂を、樵でたちまちのうちに下った、臭水（クソウズ）が湧いて流れている川（草生津川）に架かる橋を渡った。石仏が雪に埋もれている辺りは、鈴が森と同じで、罪人の処刑が行われた所だという。ここで採れる石油を燃やしたすすで墨を繕うとした人がいた。考えてみると、むかし高麗（コウライ）の曇徴（ドンチョウ）が作った墨が紀国（キノクニ）（和歌山県）にあったが、それも石油のすすで作ったもので質のわるいものだったろうか。「逢事を待つにかけたる藤代の墨に名高き楮のたまづさ」という冷泉為重（レイゼイ）の歌があるが、その時代からそのような墨がすでにあったのだろうか。

八橋に来た。

真澄はこの後、石田某の家に入り、久保田の年の市を見学することになる。

三、水の面影

文化九年（一八一二）二月、三月に寺内にある古代秋田城の旧跡を探訪した記録『水の面影』を書いた。

（筆者はこれの現代語訳に挑戦し、柴田三郎、田口昌樹両氏の協力を得て、平成十二年早春、出版することができた。現代語訳はこれを参照いただきたい。秋田県立博物館・秋田県立図書館で一覧できる）

同じ年の春、寺内探訪に同行した藤茶屋の主人のために、「梅の花湯の記」を書いている。（大館市立中央図書館蔵）

四、月のをろちね

同じ年の七月、真澄は古四王神社の摂社田村堂の神官鎌田正家、明徳館助教那珂通博などと太平山に登っている。日記『月のをろちね』の記録の中から、

この春から、このあたり（秋田市近郊）を探訪して、『水の面影』という冊子に寺内山の古跡をたどって書きしるし、『をもの浦風』という書物には土崎湊の今昔の物語を集めたが、それもまだ中途までしかできないので、この寺内に滞在していた。

（中略）こうして十六日になった。さきおとといから野分めいて荒れた風も、今日はおだやかになって、空が曇ってきたので、雨になるのか、登山はどうだろうかとためらうところへ、土崎から貞雅（岩谷氏）がでてきた。「さあお出かけなさいともかく約束した日だから、そのあたりまで行ってみましょう」と正家（鎌田氏）をともない旅支度をととのえながら、人びとのもとへ切りかけ（紙を切って幣帛（ヘイハク）につける四手）をおくろうと刻んで用意し、その袋に書き付けた。

誰かそてもぬさの追風ふきはらひ身もさよまはり山や越えなん

こうして旭の岡というところから植野をわけて、寺内の郷をはるかあとにして、燈台松のもとを経てゆくと、西に郊野（高野）、東に萱岡（カヤオカ）という村がある。このふたつの村のあいだの稲田の畦（アゼ）をわたっていくと、こしは五月の末から、いつこうに雨が降らず、田の面は割れて作物はみな枯れてしまっていた。川水を汲んで、田畑にかけて暮らしていた村々では、流れが乏しくなることから水争いが起こり、たいへんな騒ぎ

である。「もう十日も雨がなかったら生きてゆかれない。瓜、茄子（ナス）、紅豆（ササゲ）などの副食物さえ枯れはてて、何を食べたらよいのか。ああ、雨が降ってほしい」と男女とも、水乞鳥のような心地で雨を願い、日の照る空を恨みながら仰ぎ見、地面をみて、たがいに語り合い、群がって行ったりきたりしている。

ふる雨のめぐみあらずばたなつもののあを

ひとくさもともにかれなん

と、この人びとともにひでりをうれいた。鹿野雷電の田の畦伝いに板橋をわたり、寒（ヒエ）野（ノ）の道をたどって八幡田という村についた。

（中略）水口村にきた。村の中を流れる水がたいそう涼しく、なるほど水口の村名にふさわしい。庵があって、ふるびた阿弥陀仏が三体安置されている。何か由緒もあるという。鍛冶屋敷という跡がこの庵の上の岡にある。これはむかし、白坂氏が横刀・片刀を打たせた刀鍛冶の家があったところだという。このあたりは、なにかと伝えられた物語が多い。これらはみな『水の面影』というこの春の日記にくわしくのせておいた。

（中略）小菅（コスガ）野（ノ）の渡りといった渡船場もこのあたりであるという。千福（オモ）川（ノ）（雄物川）の流れがむかしはここで、通行者が向こう岸にたたずむと、船頭がこちらからそれを見て、「越かの」と声をあげて問う。そうだという答えを聞いてから、舟をさし出して渡したのだという。その「越（コス）かの」というひとことは、そのころの渡し守の口ぐせであったが、それをまね伝えるままに、ここを「小菅野の渡り」といまの世までいうことになったのだといわれている。このことは『水の面影』の中にもふれたが、ふたたびここに記した。（後略）

真澄は『月のをろちね』の外旭川の部分でも「このことは『水の面影』の中に記した」と記しているのが注目される。現存の『水の面影』上巻には外旭川の記事はないので下巻に記録されているのであろうか。

この日記の中に八幡田の村長三浦某という人の家に休んでいるが、翌年六月一日、真澄は鎌田正家とともに三浦家を訪ね、内神様である稲荷神社の棟札を残している。

表には正家が、

五穀成就子孫繁栄　願主八幡田村三浦伝兵エ
奉遷斎祭　飯成霊神　三浦氏代々尊敬之
文化十発酉六月朔日奉幣社司鎌田直沖正家敬白

と書き、裏には真澄が次のように太平山を詠んだ和歌を記している。

三の峰　四方の海山　三河国
五くさや　和きて　みとしを
守ります神　菅江真澄
花押

五、久保田十景

当研究会会員、横田正吾氏（豊橋市）がその著書『あが父母の国吉田』に『久保田十景』の彩色図絵を紹介している。久保田（秋田市）の近郊の風景を大型半紙に一図ずつ描いた彩色図絵集で十枚あり、仮題『久保田十景』といわれている。残念ながら真筆本ではないが、説明文の内容からして、原本は真澄の著作に間違いないと判断される。

図絵の空白部分には説明も書かれており、「宝塔寺紫藤」の説明文の中に「文化乙亥の年」（十二年＝一八一五）の記載があるので、文化十二年の作と推定できる。「綾小路古梅」には真澄の署名がある。この十景の中から寺内に関係のある二図の説明文を紹介する。

○綾小路古梅寺内村のうち

降つみし高ねのみ雪（深雪）も、いつしか消えがてになり、山里の垣ねにこ伝ふ（木

伝ふ）鶯も、人呼がほに囀る頃、古四大王寺のあたりに、人の語り継ぐなる永正（一五〇四―二一）の梅といふを尋ねにまかる事有り。百とせを四かへり（四百年）あまりなるいにしへの名なれば、其世の木なるやはしらねど、四そとせ（四十年）のむかし見しまでは、かたばかり朽残れる片枝、いと長くさしはへ有しも、もとみし宿にもあらぬ垣ねにたてりしを見て、いとゞ懐旧のこゝろのみすゝみければ、

みし宿はあらず成ゆく垣ねにも春はかはらで匂ふ梅がえ（枝）

綾小路古梅《久保田》十景（横田正吾氏蔵）

此さと、いにしへはことに梅多かりしとかや、かたへは城下町より土崎の湊へ通ふ大路にて、水馬（ミスマ）（船宿）やなるを茶店にて、梅の湯とて梅仁を香煎に和し、道行ぶりの人にあたふるも、久しき伝へとなむ。

真　澄

○両津山遠景

両津八幡の山上、又は五りむ峠より海上をみ渡したるは、淡海なる三井寺の高観音より鳥のうみを眺むに似かよひたりと覚ゆ。雄鹿の山々、海こしの如く聳へ、こなたの岸にはとわたる船あまた泊りをさだめ、沖のかたには、しら帆遥に出るも入来るもありて、末は空との限りも見えず、なみたいらかにして釣する船も、漕ならべたるをみて、

和（なぎ）渡る浪路を時とつり船も心ゆきてやうかぶ海（うな）ばら

（注）説明文は『出羽路』第一一七号（秋田県文化財保護協会発行）に田口昌樹氏が「『久保田十景』の摸写本発見」として発表したものから引用させていただいた。

六、おがたのつと

文化十四年（一八一七）八月十五日、寺内で中秋の名月を見た真澄は、土崎をへて上新城で「はなびこの面」を記録し、下新城の大竜寺に宿泊し、八郎潟東岸を探訪したのが『おがたのつと』である。

この日記の断簡は、田口昌樹氏によると、罫紙の柱に「椎ノ葉おがたのつと」と書かれたものが二帖と『椎の葉』という冊子に三帖含まれているというが、その中から寺内関連の部分を現代語訳で紹介しよう。

（前欠）この法師の庵を梅津利忠（名を主馬という）が訪ねて、「今日ぞ見る知るもしらぬも逢坂のむかしおほゆる草の庵は」と詠んだ。祖寛はとりあえず筆をとって、「あふ坂の関には似たる庵なれどうしや心の清水濁りて」と返歌を詠んだ。その庵はどこにあるのだろうか。あの高田の老法師も名のある者なのであろうか。

鷲森、蜂森を左に見て姨（オバ）が懐に入って、根笹山の麓にある阿羅漢寺西来院の前にある阿弥陀如来を常に祈る庵がある。庵の傍らに多くの萩が植えられていて、咲き満ちているのを見て、

さかりなる萩のにしきをみ仏の御前にぞ敷くのりのさむしろ

と詠んだ。この庵に入ると十界大曼荼羅を仏の左右にかけて、また別の仏の前で南無阿弥陀仏を懸命に唱え、金鼓を打っている

四十余りの盲人（メシイ）の法師がおられた。念佛の声の合間に「どちらからお見えになられたのか」と聞くと、ただ「尾張の国から参りました」とだけ答えて、また鐘を打ちならしているので、さらに尋ねると「（尾張ノ国）知多郡長尾ノ紫雲山皆満寺の僧侶即成である」といって、ふりむいて語った。

昨年の夏、西来院の供鐘（オオガネ）供養のあったとき、「いくちさとその暁やしのふらむ今日つけそむる鐘のひびきに」と口ずさみ、いかがでしょうかと言い、「このような盲目になっては筆をとることもできず、心も進まずに旅を続けていたところ、この大寺（西来院）の全長和尚の深い情にこの庵の主（アルジ）となることができました」と語った。

どのような歌を詠んだのかと聞くと、春に詠んだ歌としては、野のすみれを、「春深くつゆの草むらふみ分けて入野のすみれ今日はつまゝし」、春の駒を「若草の萌え出る野辺にうちむれておのか時とやあさる春駒」があります。夏の歌には、垣卯花という題で「白かさねほすよと見へて此ころは卯木（ウシギ）のかさね花さきにけり」、また、社頭という題で「神祭る杜のしらゆふかけそへて木かけをきよくさける卯の花」、秋の歌には、早秋風と題して「琴の音に通ふ軒はのまつ風もはやふきかへて秋は来にけり」、野外萩として、「はたおりのすたく野もせにさく萩の花のにしき風にみたるゝ」などがありますと、語った。

熱田神宮（名古屋市）の神主、粟田左衛門知近の事を聞くと、親しかったとのことである。禁裡御造営のとき、どこの番匠（大工）であろうか、一枚の鉋屑に、「紫の庭は見るたにおそれあるに雲井に残すすみかねの跡」と書付けたとも語った。（中略）

［柱―椎ノ屋おがたのつと］

（2）梅津利忠（寛永十四年＝一六三七―元禄三年＝一六九〇）、梅津宗家の忠国の嫡子、歌人、兵法家、通称主馬、能登。号梅叟。何故か家督は弟忠宴が継いだ。河辺郡船岡（現協和町）に隠棲した。著書に『赤神神社縁起』『軍法巻注解』『利忠公和歌韻』がある。（『秋田人名大事典』）

有名な高清水ノ岡に着いて、清水に写る月の影を手のひらで掬いあげようと佇んで、

こよひ見る月のその名もたかしみづわきてぞすめる秋のなかぞら

と詠んだ。根笹山に来て、ゆっくりと月を見ながら歩いて、

むらがらす根ざゝの山にねもやらでこよひの月にうかれてや鳴く

と詠んだ。児桜の岡、放れ山、雷電の社などを見渡して、なおもあきずに見歩いた。

また、阿弥陀堂に入って即成法師を訪ねると、法師は「これは珍しい、月の友が見えられましたね。いま鴈が仄かに鳴きました」と言って、「名にしおふ月も名のみと聞く斗り耳にさやけき初鴈のこゑ」と歌を詠みましたと言った。この歌は『異本職人尽歌合』にある、「さぐれども手にもさはらぬ月影のさやけきほとをかぞへてそしる」と詠まれてあるのに、その気持が似ていてたいそう哀れに思われた。翁（鎌田正安）が詠まれた歌もたくさんあったが、ここには漏らした。夜も更けてきたので、さあ帰ろうと翁に誘われて帰り、休もうとすると、早くも月は白んできた。旭さし槻は朽ちてしまいあとかたも無い辺りを眺めて、

山のはを出る朝日にありしその槻も名のみと消ぬる月かけ

［筆者注・旭さし木は現在も生きており、真澄の勘違いであることを付記しておく］

十六日、正安ノ翁は急ぎのことがあるとて久保田に行った。正家と今日も語り合って、夕暮れ近くになって、本誓寺の是観上人が土崎の浦に行った帰りだといいながら入って来て、「三日の夜の空にわかれてこよひ

またいざよふ月もまちかたらなむ」と詠まれたので歌を返した。

出がての空ぞうれしきいざよひの月のしたみち君や帰らむ

十七日、しばらく会っていない湊の岩谷宗章のところへ昨日、「音信も絶えて日をふる鈴虫のこゑめつらしくあすはきかまし」と歌を送ったところ、「早くお出でなさい」と返事があった。この文の奥に返歌がある。

［柱―椎ノ屋おかたのつと四］

「此宿をはやとひきませ鈴虫の音にまつむしのこゑそへて鳴く」とあった。これを見て、またその返歌「すずむしの音にまつむしのこゑそふるたのしき宿をいまやとはなむ」と詠んで、鎌田正家と別れて、高清水の岡を越えて、伽羅橋を渡り、左手に雄物川を見ながら高岸を進んだ。早くも八目鰻を捕る筌（竹を編んで作った魚を捕る道具）を伏せていた。そのため小八幡という洲崎から小舟に乗り、網を曳きあるくさまを見下ろした様子がおもしろく見えた。古道を出て新道を横切って、烏が池の辺りを通り、

むらがらすねぐらに皈るおのが名の池にむれ行影をうつして

と詠んだ。儀定が島を来ると、左手に船か沢という所があった。みな由緒のある所である。法興寺の松原に宗章の住む松箏亭がある。門で呼ぶと主人が出迎えて、「しばらくです」などと語った。庭にはさまざまと植えられていて、秋の景色となった木立を見せた住居である。

松風のことひくやとはいく千世の秋もたのしく月やすむらん

と詠み、しばらくして法興寺に入った。

（後略）［柱―椎ノ屋　おがたのつと　五］

法興寺（現見性寺）山門

（3）法興寺は日蓮宗の寺であり、天明元年（一七八一）に建立されたものであるが、大正十二年（一九二三）になって山形県に移転し、その跡に同宗門の見性寺が移ったものである。見性寺（秋田市土崎港中央二丁目七―二十一）の山門は法興寺建立時のものであり、真澄が訪ねた当時のままである。秋田市三楼門の一つである。

七、新古祝甕品類之図

『おがたのつと』の旅は古代から中世にかけて、神前にささげた祝甕探訪の旅でもあったと思われる。真澄はこの時の旅の中で、寺内、下新城、金足、大久保などでも祝甕を記録している。寺内で記録した祝甕は鎌田正安（正家の父）家で見たものである。図絵に記された説明文を原文のまま紹介しよう。

此二陶、同郡寺内村、鎌田正安蔵。両ツながら寺内の根笹山の近き辺り、長者平ヒといふ地口より掘り出しといふ。甲壷は黒色也。乙土杯はうす黒く、蘭おほしく南とも見べき文字あり、此寺内にむかし陶作りやありけむ。くさ〳〵のはにものを掘り得る。雷盆、小甕やうのもの、みな内に波型、

鎌田家所蔵の甕二点

網ノ目、布目あり。この陶器、旧家などにつたふものみな同じ。

八、筆の山口

文政五年（一八二二）の正月、真澄は各地の歌会に出席していた。日記『筆の山口』一月十八日の記録。

十八日、今日は（柿本）人麿の大神を祭る日なので、是観上人とともに土崎に行こうと、笹原寺（本誓寺）を出て、八橋なわての雪の上を橇に乗って引かれて行くと、をろちね（太平山）、矢櫃嶽（太平山前嶽か）、馬場目山などが霞わたり、雪は日影にきらきらとかがやき、まぶしいほどであった。

をろちねは春と霞めどもたかを神ふらする雪のいやたかくして

（たかを神は竜神で雨を司どる神であり、谷の水の神ということになる）寺内の鎌田正家が用事で外出するのと坂道で会い、新年の挨拶をとりまぜてなにかと語っているうちに、橇がおされるので、

今しはとかたらふひまもなかなかにそりのはやをのはやきやまみち

こうして、寺内になり、古四王の社の御前にぬかずき、

ひろ前の雪のしらゆふそのまゝに手酬る

こしのおほきみのみや

土崎湊に入って、問屋船木武定の家について、鎌田正安ノ翁、石田友良、主人の母である綱子、是観上人などと語り合った。

［筆者注・真澄が古四王神社に手向けた「ひろ前の……」の和歌は、平成十年七月十九日（真澄の命日）に、「菅江真澄没後百七十年祭」を記念し、歌碑に刻まれ、古四王神社境内に建立された］

古四王神社の歌碑

九、笹ノ屋日記

文政六年（一八二三）の日記『笹ノ屋日記』にも古四王神社の記載がある。笹ノ屋（秋田市旭南）の記録である。

今日は古四王神社の落忌（としみ）なので、昨夜から大勢の人が宮籠もりをして、今朝になってから詣でる人もたいそう多い。

私は去年の正月に詠んで奉った歌があるので、再びここに載せた。

ひろ前の雪のしらゆふそのまゝに手向る高志のおほきみの宮

この日記は現存する日記の中で最後の日記となっている。

十、古志王神社条（コシノオホキミノミマヤキ）

現在残っている『水の面影』上巻には、古四王神社については詳記されていないが、『混雑当座右日鈔』の裏書資料の五丁―六丁の『水ノ面景・高志王神社条』、二五丁―二六丁の『水の面影・高志王神条』（出羽国秋田人の肩書がある）の二つの草稿があるが、本稿では五丁―六丁分を原文のまま紹介する。

出羽国秋田郡率浦（出倭名鈔）荘寺内ノ郷なる亀が岡に古四王宮あり。古ハ四天王寺とて大寺もありて官舎定額にならぶべき寺々もいと多かりし由縁（ユエヨシ）をもて、今し世かけてもはら寺内と称（トナ）ふ也。いにしへ聖徳

太子天竺の浄明居士をしたひて、妻子もたまへれど、ひたふるに仏道をならひ給る。

笹野町政所円常坊なゝといふ地あり。これを考おもふに、後紀十九巻に、「天長七年（八三〇）正月云々、出羽国駅伝奏云今月三日辰時大地震動如雷霆城郭宮舎並四天王寺丈六ノ仏像四天等皆悉顛倒城内屋仆撃死百姓十五人支体折損之類百余人云々、地之割辟甚多大河涸尽流細如溝云々」と見えたり。聖武天皇の御代天平五年（七三三）出羽柵秋田村高清水ノ岡に遷し給ふとあり、出羽の柵とは出羽郡に在りつる柵にてやあらむそをうつされし柵戸なども九十七年を経て淳和天皇ノ御代天長七年庚戌正月三日、むなしく、また推古天皇の御代に建給ひる伽藍坊舎甍とも、なごりなう此大地震にふりこほれはてて、山は原となり原は山とし高く川は岡に化れるにや。今の高清水の岡もいにしへさまにはあらざるへし。

此高清水の岡に高志王宮四王寺を遷されしも、陣営となり火かゝりて回録せし事も三四度にもあらむ。今の古四王社ハ後柏原院の御世文亀二壬戌年（一五〇二）に安東太郎某造立の事古四王宮ノ神主高橋家貞の記録に見えたり。津の国の浪速の玉造のきしべに営作られたりし護世四天王寺をこぼちとりて、推古天皇の御世に荒陵山のひむがしに移し給ひしが如に、この秋田の四天王寺も初の地とは大にこと処に移しもて建たりけむ、今水口村の八幡田の田処の名に政所あれば大寺の有りし処と思れたり。大寺には兄部政所あり、羽黒山に政所坊として今あり、善光寺に兄部あり、大寺古ル寺にかならずさる名あり、また定額あるなゝどはいと〳〵をもき御寺也。

また、神田村にそも〳〵古四王ノ宮在りし地なるよしをもて、沖神田村、中神田村、三月田村、中嶋村、曲田村、此五村はみな古四王を本居ノ神と斎奉りて、正月の精進潔斎ハ寺内におなじ。中嶋は今村の廃頽、四村のみ古四王宮祭り奉る事也。此神田もいにしへ古四王の神田より負ふ名ならむ。

神田村の山に黒駒ノ社、白駒ノ社とて石馬形を祭る、是を考ふに、太子伝に「聖徳太子驪駒に駕して朝参す。驪駒あやまちて蹄を御足にあつる慮所有て早退く、是より驪駒草を喫せず、亦水も飲まず、両耳を掩ひ低して目を合せ過を侮る事あるに似たり。太子これをきこしめして、人のごとく遣して赦して、よろしく草を喫ひ水を飲むべしとなり、すなはち目を開き水草を飲むべしとなり、すなはち目を開き水草を含む。のち太子薨逝の日水を喫せず、輿に徒て陵にいたり大に鳴て一躍りして斃る。群臣大に異なりと云て、みなこれを愴墓を作り埋勅して大墓といふ」云々と見えたり。此黒駒ノ社といふは其大墓をや遷してむものか、白駒ノ石ハ黒石駒に対べて後に斎りけむかし。又、此近きに豊御食炊屋姫天皇（推古天皇）の御陵をうつして、そこを御座平とひといひ、山を推古山と、赤沼といふ沼の岸に在り。

此陵祭とて（以下欠）

［（筆者注・本項についての内田武志の見解、文化九年（一八一二）春には、大社の由緒よりも、小さい神々の探究に心がうばわれて、あまり記そうとしなかったのである。それが地元の人や藩士たちの不興をかっているのを知った真澄は、改めて、古四王神社の詳細な縁起を書いて、「水の面影」の表題を付している。『混雑当座右日鈔』の裏書きに残されている二つの草稿は、地誌形式となっているから、文政五年（一八二二）ごろの記載であろう。「未完成本の解題」（菅江真澄全集第十二巻より転記）］

参考資料

『菅江真澄全集』第三巻、第四巻、第九巻、第十一巻、第十二巻

その他の文献は、その都度明記した。

（当研究会会員・秋田市）

『久米路の橋』をたどる旅（二）

田村国竹

平成九年より続けて来た菅江真澄（白井秀雄）の足跡をたどる旅、今年も『久米路の橋』を中心に会員二十三人、梅雨入りの前の六月八日バスでの旅を試みた。

真澄は天明四年（一七八四）の六月三十日、住み慣れた洗馬釜井庵を立ち、松本、穂高、大町へと旅を続け、七月十七日、更に峠を越えて更埴へと向かった。今回はその旅をとりあげ、バスは大町市より美麻村の大塩へと向う。

この里を立ちて峠にのぼる。ここを女犬原（メイヌハラ）といふ。（《久米路の橋》以下同じ）

昔、静御前が義経の後を追って「奥州は見えぬか」と大塩まで行ったが、失望のあまり杖をさして嘆いたその杖が、桜の木の老樹となったという伝説の老木が今もその大塩に威風を残していた。

左右（ソウ）むら（信州新町）を過て（中略）不動坂をおりて、向かたの巌より麻苧の糸のみだれかゝるごとく落くる水を、すなはち不動の滝とぞいふめる。

バスは左右（信州新町）を過ぎて、幾重にも曲がりくねった新道の谷間を下って更に登ると、新緑の木々の間から、白く幾すじもの水の落ちくる滝の流れが見えてくる。不動の滝である。真澄はすぐ下にある橋木にて昼食をとり、犀川に沿って下っている。

バスは茅原にある日置神社、牛越坂、鹿道へと進む、

牛越坂をこゆれば歌道村（カドウ）（信州新町）といふあり。ここにある神籬を人麿大明神と申し奉り、（中略）かたはらにあるを人麿の池といひならはせり。

人麿の池は国道十九号線の西側斜面上方の小高い平地にあり、昔栄えた村落の名残りの歌碑が荒れ果てた池の路傍にひっそりと立てられていて、その盛衰を物語っているようでもあった。

むかし馬場美濃守のこもれる琵琶城といふ其あと残りぬ。

琵琶城は、牧之島城とも言い、武田信玄の家臣馬場美濃守信房の城であり、犀川の段丘にあった。堀の跡が当時の城の面影を残していた。この城跡から川向うに、皇足穂（スメタルホ）神社の森が見える。

穂苅りといふ村（信州新町）の宮沢てふ森に皇足穂神社（式内社）をあがめまつるにまうでぬ。

バスは上条を過ぎて水内（ともに信州新町）へと向う。

みたにのそこ行水は、木曾路川、梓川、高瀬河みな此犀川一筋に流れ入て、さかしき岩山にせまり、たぎり落くる水は、はなだをまとふがごとし。其ときこと箭のごとく（中略）筏を滝より、まくだしにくだし、みなそこに落入りかくろひぬ。（中略）見るさへ身の毛もいよだつに、なりたるわざとて、やすげにのりくだしたるは、世にたぐひなき高名の筏士なり。

犀川のダムは湖面いっぱいに水をたたえ、真澄の見た犀川の面影はなかったが、湖底に秘めた当時の面影と、みごとに筏で急流を乗り下す当時の姿が、目に浮かぶようでもあった。

かの犀川の岸つたひ桟（カケハシ）ありて、いと大なる立石をめぐりて曲橋をふみぬ。（中略）そのかたちは、たくみ等が曲尺てふものにことならず、此名、久米路のはしともこれをいふとか。

久米路へ向かう旧道を走ること、国道十九号線から約三分、犀川のほとりの崖を西より東に架けられた桟は更に曲尺の如く直角に犀川に掛けられており、真澄の日記そのままの姿であった。白猿橋と句詩にも歌われていたというこの橋の下は、ダムの水が満面波をたたえていたが、橋下の飯縄の神の祠や、鳥居は近くの丘の上に移し祀られていた。

四方のやま〳〵しげりあひたる木々のたたずまひ、この山河の水のありさま、橋のことなるおもしろさ、いかばかりつくり絵に工なる人のうつしなすとも、をよぶべきかは。

真澄が日記の題名を『来目路乃橋』とした想いや感動が伝わってくるような絶景でもあり、真澄のこだわりもわかるような場所でもあった。

バスは久米路の橋を渡り川の東側斜面を田野口へと向かう。

鳥坂（トッサカ）、深山（ミヤマ）などいふ処をへて、長谷（ハセ）村（長野市）にいづ。ここなる観世音の堂は、いにしへは長谷（ナガタン）ノ神社（式内社）にこそありけれ。

田野口を過ぎ曲がりくねった小道をいくつか曲がり、鳥坂峠を越えると視界が急に開け、千曲の川が眼下に見渡せる。長谷寺の鳥居をくぐり、寺の本堂へと向かう。千曲川の西側山麓に建てられた長谷寺には、真澄が見たという観世音が祀られていた。バスを治田神社へと進める。

治田（ハルタ）神社（式内社）は稲荷山村（千曲市）の本町てふ処に、いま、下の洲輪（諏訪）をうつし奉り、桑原（千曲市）といふ村にも亦治田のやしろにして、上の須羽（上諏訪）をまつり奉るといひ、八幡村なるは武水別の神社（式内社）也。

下諏訪の神を移し祀ったという治田神社は千曲市の西側、姨捨山を背負った田舎風な町内の公園の中に建てられ、上社を移し祀ったというもう一つの治田神社は、その南およそ二キロ程離れた栗原地籍にあった。バスは武水別の神社前を通り、更級神社へと進む。近ごろ改修されたという本殿は木の香もただよい朱色の柱は色あざやかに輝いて見えた。

千本柳、戸熊（千曲市）などといふ処をへて、河辺づたひに姨棄山を見やり、去歳のぼりし処なれば、猶ゆかしう、（中略）目もはなたず舟にのる。

千曲川に掛かる大正橋を渡り、堀口氏（郷土史家）の案内により、戸倉駅近くの真澄も歩いたという千本柳、徳間など八幡街道についてお話を聞く。はるか西山に見える姨捨山、東側の鏡台山は姿が見えなかったが、雄大な裾野をすぐそばに見ることができた。

真澄が訪ねたという苅屋原、板城（サカキ）を南にしながらバスは国道十八号線を北へと進み、寂蒔（ジヤクマク）を通り中村神社を左に、栗佐神社へと向う。

此処のあわざといへる処にかん垣の有ける。栗狭神社（式内社）にぬさたいまつりてここをいで来れば、ある宮どころを須須岐水の神と申奉る。

国道十八号線栗佐を左折すると、樹齢何百年という欅の木に囲まれた栗佐神社の本殿が目に入って来る。立川流宮大工の改修した本

殿の右側には古い社が歴史の重みを感じさせるように建てられていた。

真澄は須々岐水の神社を訪ねた後、更に松代へと旅を続けるが、私達は最終見学地長野歴史博物館へと向かう。そして善光寺御開帳の特別企画展を見学して帰途についた。

真澄六日間の旅を、およそ十時間でたどったあわただしい旅であったが、随所に見られるあるがままの記述、丹念に調べられた行き先ざきの故事来歴に今更ながら驚き、感動させられた一日でもあった。

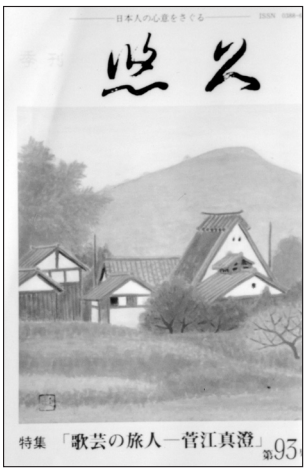
（長野県・釜井庵と菅江真澄研究会会長）

参考文献　『菅江真澄全集』一巻（未来社）

不動滝前の橋にて

●雑誌紹介

『悠　久』　鶴岡八幡宮



鎌倉市の鶴岡八幡宮の「悠久事務局」では雑誌『悠久』第九十三号を特集「歌芸の旅人—菅江真澄」として発行した。内容を次により紹介する。

〔真澄という人〕　白井永二

『日本人名大事典』など四点の辞典の中から「菅江真眞澄」という項目を紹介し、編集者が鶴岡八幡宮白井永二名誉宮司（当研究会会員）に質問するという形式で記述されている。

「真澄の出身」「真澄の学問」「真澄の絵修行」「真澄の業績」「真澄と神道」「おわりに」と六項目にわたって述べられている。眞澄の父「白井秀順」（秀真）、真澄の師とされる植田義方、丹羽嘉言、遠江の二宮神社の勾玉などを紹介しながら真澄像にせまっている。

〔菅江真澄の短歌〕　岡野弘彦

真澄の歌に対し、柳田国男が痛烈な批判をしていることは、よく知られているところである。著名な歌人である岡野弘彦（読売歌壇の選者など）は、国学院大学の出身であり、若い頃に柳田国男、折口信夫に師事した人でもあった。岡野は歌人としての本居宣長の晩年に、「夜ごと夜ごとに床についてこころにまさまざと去来する桜の幻をとらえた三百余首を集めた歌集『枕の山』について「そぞろにものくるほしい心のほどが伝わってくる」と評価している。

一方、真澄の天明三年の歌集『あさがお百首』（『科野路旅寝濃記』＝伊那の中路の異文、の朝顔に関連した歌九十四首に仮題を付したもの）を取上げ、「朝顔という一つの題材に焦点を据えて、読む者の心をそらさないだけの作者の心の熱さと凝縮は、はっきりと感じ取ることができる」とし、三十路に入ったばかりの真澄が、「素質の点、和歌の姿やしらべの美しさの点でいえば、真澄が宣長に劣っているとは決して思われない」としている。

そして、「われわれを打ちときめかせてやまぬような、成熟した彼の和歌の真価を示す

作品の集録が、しょっこり現れる」のではないかと結んでいる。

（歌人・国学院大学栃木短期大学学長）

〔柳田国男と菅江真澄〕　田中宣一

成城大学教授田中宣一氏（当研究会会員）の記述。

田中はいう、「真澄の業績は不変だとしても、もし柳田国男が存在しなかったならば、現在、真澄がこれほど多くの人々に高く評価されていたであろうか、（中略）真澄がいなかったならば、柳田国男の学問の艶もいくらか異なったものになっていたのではないであろうか」と問題を問いかけている。

「柳田の真澄評価」～気力と旺盛な知識欲に感服し、真澄の旅の風景の背後には村々の生活を思い、人々を観察してはその心情に共感している。また、その著作については、常民生活の具体的な見聞録だとし、その客観性と描写力を高く評価している。一方、真澄の文章（というよりは文体）には癖があり、悪文の一種だと評し、多用されている和歌に対する批評も厳しいとしている。

「柳田の功績」～日記風紀行文や地誌の内容を正当に理解し、それらを真澄ゆかりの地のみのものとはせず、常に全国の多くの人々への紹介に努めたこと、単なる真澄の著作内容の紹介にとどまらず、年譜（ないしは伝記）作成に腐心し、その作成の端緒を開いたこと、覆刻本・校訂活字本の刊行を試みたこと、真澄没後百年にちなんで、真澄ゆかりの地同士による連合の百年祭を企画（実施はされなかった）の四点をあげている。

田中氏は「柳田国男は、菅江真澄の研究家であるとともに啓蒙家であり、真澄の強い理解者、大のファンであった」と結んでいる。

〔呪歌の書にみる呪術制〕　松山　修

真澄の残した遺墨資料の中から呪いの歌として、「火伏せ」「避雷」を紹介・解説し、これらの資料が秋田県西仙北町土川地区に残されたものであることを報告している。

（秋田県立博物館学芸主事・当研究会会員）

他に「臼曳歌考」（真鍋昌弘）、「菅江真澄の記した婚姻儀礼」（豊島秀範）「真澄の名乗」「菅江真澄略年譜」など。

※発行所鶴岡八幡宮悠久事務局

鎌倉市雪の下二―一―三一

☎（〇四六七）二二―〇三一五

価　格　六八〇円＋税

なお、鶴岡八幡宮悠久事務局から本誌をご寄贈いただきました。厚くお礼申し上げます。

おめでとうございます

栗林次美氏（大曲市・会員）

大曲市長に当選されました。

山田博康氏（阿仁町・理事・阿仁真澄を研究会会長）

阿仁町議会議員に当選、議長に選出された。

嶋田忠一氏（秋田市・会員・秋田県立博物館勤務）

日本博物館協会顕彰を受賞。

琴丘町・町民野外劇「縄文ページェント」

財団法人「あしたの日本を創る協会」の全国ふるさとづくり賞の内「内閣官房長官賞」を受賞した。真澄が命名した「琴の湖」を前面にだして毎年実施されている。

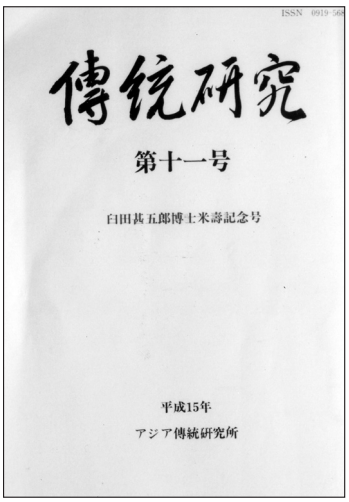
手這坂活用研究会（峰浜村）

全国ふるさとづくり賞の内、「主催者賞」を受賞した。真澄が日記《おがらの滝》に文と図絵を残した「手這坂の萱葺き集落の保存と活用」をめざして活動を続けている民間団体。

●論文紹介

「菅江真澄の若き日を追う」

白井永二　著



鶴岡八幡宮名誉宮司白井永二氏（当研究会会員）は『傳統研究』第十一号に標記論文を発表した。

「尾張での勉学」

真澄が尾張で漢学を学んだとされる丹羽嘉言の著作『謝庵雑記』にある知之（真澄）十二、三歳のおり、初めて詠んだとされる和歌「風よ風ちりも爲らはす吹ならはこゝろのうちをいさゝそへかし」を紹介し、真澄と嘉言の師弟関係を論じている。

嘉言が漢文で記した『湖東遊記』を超（真澄）が和文で綴った「胆吹遊草」について、「訓読を試みたいというのではなく、超は『湖東遊記』のこころを歌文、雅文で試作した」と解釈しているが、多くの人が共感するのではなかろうか。『菅江真澄全集』別館一（未来社）に全文が掲載されているので、読者各位にお勧めしたい。

また、嘉言の『謝庵遺稿』には自身が隠居所としていた庵を「般室」と呼んでいたが、それについて嘉言は「般室記」を漢文で残しているが、超（真澄）もまた、和文で「般室記」を書き、「石居記」についても同様である。嘉言は漢学者ではあるが画家として著名であり、白井氏は真澄は絵についても嘉言に学ぶことがあったのではないかと推定している。

「信濃にある尾張の作品」

白井氏は尾張・三河で書かれた真澄の著作「浄瑠璃姫六百回忌追善詩歌連緋序」（岡崎に伝わる浄瑠璃姫と義経の悲恋物語）、「枝下紀行」（豊田市枝下のあたりを歩いた記事）について、これの内容を詳細に紹介し、書かれた背景などを考察し、これらの著作が信濃に残された事情について想いをはせている。（二つの著作は『ふでのまゝ』に収載）

「信濃の歌修行」

秀雄（真澄）の天明三年（一七八三）の信濃訪問にふれ、真澄が本洗馬に残した『雄甫詠草』『あさがお百首』（仮題）を取り上げている。さらに洞月上人から伝授された「和歌秘傳書」にふれている。

他に「歌人秀雄の旅」「喝食の文芸」「白太夫と金花香」「菅園家集と常冠り」など。

白井氏は「おわりに」の中で「他の何処の藩とも較べて秀れた真澄の遊覧記が、いち早く当時生れた新政府の文部省に認められ、秋田県に大きな反響を齎した。このことは、石井忠行、真崎勇助などの探求心を呼びおこし三河から来た旅歌人の業績を慕う有力者が跡を断たなかった」と記している。また「あれこれと故郷を語っているらしい真澄の文を読み解き、次の作業を考えながら筆を擱くことにする」と結んでいる。

白井氏は相当のご高齢に達した方と思われるが、旺盛な探求心を絶やすことなく、若い会員をご指導願いたいものと期待しております。

※『傳統研究』第十一号は発行者―アジア傳統研究所
東京都大田区南馬込四丁目四十四―十
にお問いあわせ下さい。

※なお、白井永二氏からは『伝統研究』十一号当研究会にご寄贈いただきました。事務局の書架にて保存しておりますのでご活用下さい。

●図書紹介

『おもひつづきたり』

安水稔和　著

副題に―菅江真澄説き語り―とあるように著者（詩人・神戸松蔭女子学院大学教授・当研究会会員）がこの十年ほどの間に菅江真澄を主題として、各地で行った講演記録をまとめたものである。北は秋田から南は愛媛まで十一都府県・十六項目の講演記録を収載している。

その中で「真澄の今」は平成七年「第八回全国菅江真澄研究集会」での記録である。神戸市長田区に住む著者はこの年一月神戸の大地震で罹災していた。また研究集会が開催された五月二十七日は、十二年前に起きた日本海中部地震が起こった翌日であった。講演の内容は、文化八年（一八一一）八月男鹿滞在中の真澄が実地体験し、『男鹿の寒風』の中に記した男鹿地震との対比から始まった。時代も地震の規模も異なるが地震後の人々の行動が酷似していることに驚かされたという。

平成十年七月、「第十回全国菅江真澄研究集会」は秋田県大森町で開催された。当日朝、主催者から突然挨拶をといわれ、話したのが、「〈私〉の菅江真澄像」である。大学の講座「日本文化論」の中で初めて菅江真澄を学んだ学生たちが真澄を理解していく過程が語られている。秋田に住むわれわれが、小中学生や高校生、大学生、若者たちにどのような啓蒙活動をしているだろうか、考えさせられる講演記録である。

他の講演記録も著者（講演者）の真澄に対する深い造詣と思いが語られている。

著者は一昨年『新編　歌の行方―菅江真澄追跡』、昨年は『眼前の人―菅江真澄追跡』を出版している。これからも一年一冊のペースで《真澄の本》を執筆予定という。健筆に期待したい。

※発行所　編集工房ノア
価　格　二、五〇〇円＋税
一般の書店から求められます。

新入会員の紹介

（平成15年11月30日現在）

秋山　正信　秋田市旭川新藤田東町2-10
高橋　一夫　秋田市土崎港北二丁目25-19
佐藤　康治　秋田市山王中島町3-32
三沢　廣治　秋田市新屋寿町5-34
野口　良孝　秋田市新屋朝日町3-11
福司　　満　山本郡藤里町藤琴字三ツ石脇125

寄付金のお礼

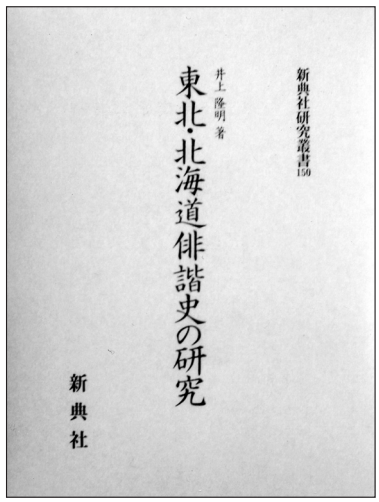
井上隆明様　１０、０００円
運営資金の一部としてご寄付いただきました。

長岐紘一様　２０、０００円
元顧問長岐喜代次さん（九月十九日死去）の香典返しとしてご寄付いただきました。

●図書紹介

『東北・北海道俳諧史の研究』

井上隆明　著



前秋田経済法科大学学長井上隆明氏（当研究会顧問）は標記図書を刊行した。東北六県・北海道の江戸時代における俳諧史を県・道ごと、更にはその県を細分化し、地区の特徴をとらえて執筆している。例えば秋田県の場合「県南地方」「由利海岸地方」「中央部地方」「県北地方」にわけて解説している。

本書は歌枕の地として名高い松島、象潟や平泉などの地を訪れた大淀三千風、松尾芭蕉、与謝蕪村、俳人とはいえないが東北の俳人と交流が深かった菅江真澄などの東北旅行を縦糸とし、地方俳人の地元での活躍記録を横糸に多くの俳人を紹介している。

次に真澄との関連の記述を紹介する。

「桂葉・里鶯」～能代淳代寺の修験父子、北村季吟の弟子、《雪の道奥雪の出羽路》に登場。「梅津其雫」～秋田藩家老、宝井其角の弟子、《雪の出羽路雄勝郡》に登場。

「吉川五明」～久保田の商人、秋田の俳壇に全盛期をもたらした人、真澄が天明五年（一七八五）七月二十二日に五明を訪ねたことが、『五明住所録』に記載されている。《ひなの遊び》などに登場。

「五十嵐嵐児」久保田の人、五明の弟子、画家、《ひなの遊び》に二枚の図絵を残している。《男鹿の秋風》に登場。

「伊藤鶏路」花巻の医師、天明五年九月、真澄は十五日間滞在している。《けふのせばの》に登場。

「竹越里桂」深浦の回船問屋、屋号若狭屋、真澄の深浦滞在に力があった。《津軽のおち》などに登場、

「竹越白湖」深浦の回船問屋、屋号小浜屋、若狭屋の分家、若狭屋が衰退した後、真澄を庇護した。享和元年の真澄秋田入りにあたり、土崎湊まで送り届けた人。《雪の道奥雪の出羽路》などに登場。小浜屋の子孫の家には真澄の遺墨が数点残されている。

「遠藤文石」弘前の薬種商、真澄が津軽藩の採薬行に出発にさいし送別会を開催している。寛政十二年三月（一七九九）に『百韻翁草』という連俳句集を出している。文石のほか藩士の後藤嵐尺、角田其友の三人が江戸の俳人鈴木道彦の発句「柴の戸や貴久もてなしに人も来す」を初句に三吟百韻を綴ったもの。真澄はそれに三河低馬というペンネームで序文をのせている。享和元年（一八〇一）八月、真澄が弘前を去るにあたり、三人の内、其友が見送りに出ている。《にしきの浜》の記事である。《外浜奇勝》に登場。

この他真澄の著作に登場する多くの俳人たちが紹介されている。

以上のように真澄の旅が東北・北海道の俳人たちとの交流の中で行われたことが語られている。

なお、本著作は社団法人芭蕉翁顕彰会（三重県上野市）主催の「芭蕉祭」において「文部科学大臣奨励賞」に選ばれた。俳諧・俳句に興味のある人いがいに、真澄ファンにもぜひ一読をお勧めしたい。

※発行所　株式会社新典社

価　格一四、〇〇〇円

一般の書店から求められます

●図書紹介

『真澄墓碑に刻んである長歌』

鈴木太吉　著

撮影　横田正吾氏

当研究会会誌『菅江真澄研究』第二十五号（平成六年）から第三十号（平成八年）にかけて、五回にわたって掲載した論考を校合訂正し、一冊にまとめたものである。

真澄の墓碑は秋田市寺内大小路にあるが、この碑文の解釈については、諸説があった。特に「三河ノ渥美小国ゆ」の読み方に問題があった。筆者の知りうる記録としては、昭和三年（一九二八）、真澄の没後百年祭を記念して発行された村井良八著『菅江真澄翁傳』（自家版）の中には「三河ノ渥美小国田」と記されている。また、昭和六年（一九三一）に発行された『秋田叢書別集菅江眞澄集』第三巻も「三河ノ渥美小国田」である。この読み方が一般的だったのであろう。

一方、中央で真澄を取上げ、紹介した柳田国男はその著書『菅江真澄』（昭和十七年＝一九四二・創元社）の中に「三河の渥美小国田」と紹介している。内田武志も『菅江真澄遊覧記』（一）（昭和四十年・平凡社）の中で柳田とおなじく、「三河ノ渥美小国田」としていたが、版を重ねるあいだに「三河ノ渥美小国ゆ」と正しい読み方にかえている。

柳田が真澄の墓碑を見たという記録は聞かないし、内田は病のため外出の出来ない体であったから、墓碑を直接見ることは出来なかった筈である。内田は『菅江真澄遊覧記』（一）の初版本を書いた時点では「小国田」と読んでいたが、途中「小国ゆ」と読むことに気づいたのであろう。その経緯を知りたいものであるが、今となっては確認の仕様がない。

また、「渥美小国田」「渥美小国」にしても「小国田」「小国」という地名は渥美郡はおろか、三河ノ国にも存在しないとされてきた。その為、真澄は存在しない地名を墓碑に刻ませ、自分の故郷を隠したとの憶説の根拠とされたのである。

著者の鈴木太吉氏は明治四十五年（一九一二）生まれ、神宮皇学館本科（国語漢文専攻）を卒業後、愛知県内で高校・中学の教師・講師を五十年間にわたり務めた方である。一方歌誌『アララギ』の会員でもあった。なお、当研究会の会員でもある。

著者は「小国田」と「小国ゆ」については、数種類の拓本を吟味し「田」と「ゆ」（由）の違いをあきらかにしている。

また、墓碑に刻んだ墓碑銘の作者である鳥屋長秋が万葉集の研究者であることに注目し、長秋が「渥美小国」と刻んだ根拠を明快に解決してくれたのである。一読して読者を納得させる一冊である。自信をもって推薦したい。

本書は同じ愛知県新城市に住む塩瀬忠夫氏（当研究会会員）が発行したものである。

※発行所
〒四四一―一三六二
愛知県新城市平井字西原二十四―一
塩瀬忠夫
TEL・FAX〇五三六―二三―〇〇二一
価格　八百円（送料・消費税ともに）
注文いただければ振替用紙同封の上、お届けします。

真澄往来

◇『東北の湯治場・湯めぐりの旅』　永井登志樹氏

理事永井登志樹氏（男鹿市）は標題の図書を秋田市の無明舎出版から刊行した。「泥湯温泉・菅江真澄と秘湯を旅する」「栩湯温泉・幻の湯治場探訪記」には、真澄の『高松日記』『勝地臨毫雄勝郡』が紹介されている。その他、東北六県の鄙びた湯治場探訪の記事二十七編が取り上げられている。価格一、七〇〇円＋税、一般の書店から求められます。

◇「寺内にあった湊三カ寺」　佐藤宗久氏

秋田市の監事佐藤宗久氏は土崎史談会発行の『史談』第四十三号に標記記事を掲載し、秋田市寺町にある大悲寺、妙覚寺、（禅）光明寺の三カ寺がかつて寺内にあったことを『水の面影』を引用解説している。また、この三カ寺の山号が、すべて「亀」という文字が使われていたことにふれ、古四王神社との関連を論じている。

◇「三河生まれの菅江真澄」　新野直吉氏

秋田県立博物館名誉館長新野直吉氏は、新ジュニア版『なるほど秋田の歴史』を秋田魁新報社から出版し、その中に「三河うまれの菅江真澄」として真澄を取上げております。新野氏は「秋田に生まれ育った人でなかった旅文人であるにしても、真澄を近世秋田の代表的な文人の一人に数えるのは、決して不当ではない」と紹介しております。価格一、六〇〇円＋税、一般の書店から求められます。

◇「江戸時代秋田の市場」　田口昌樹氏

田口昌樹副会長は副題を「菅江真澄の見た定期市・年の市」とし、真澄が旅の中で見学し、日記や地誌に記した定期市・年の市について、真澄の記録と現在の市場の模様について記したもの。西馬音内の市・久保田年の市・扇田笠の市・五城目餅あいの塩・今宿市姫の柳・浅舞市神の石・増田の朝市・刈和野の大綱引き・神宮寺市神の祭・大曲益の松を取上げた。随筆誌『叢園』第一七〇号に発表。

◇「菅江真澄と男鹿半島」　田口昌樹氏

副題に―男鹿半島の社寺―とあるように、真澄が記した男鹿半島の社寺とそれらの現況を実地探訪の上記したものを秋田市立高校同窓生文芸同好会機関紙『潮』第十一号に発表した。東湖八坂神社、八竜神社、船越神明社、本山日積寺（本山神社）など天王町から男鹿市南磯の社寺九カ所を紹介している。

◇「真澄が選んだ久保田十景」　田口昌樹氏

真澄の図絵集『仮題久保田十景』について解説。真澄の真筆本は未発見であるが、これが模写された経緯についての自説を発表し、あわせて、当研究会総会において、会員清水英明氏が「久保田十景」について研究発表することをPRし、一般の人にも総会への参加を呼びかけた。秋田魁新報文化欄に掲載。

◇「菅江真澄と山毛欅」　高橋順子氏

高橋順子氏は一九四四年（昭和十九年）生まれの詩人。詩集に『時の雨』（読売文学賞）などがある。写真雑誌『週刊四季花めぐり』二十八号（世界遺産・白神山地）（発売元小学館）に標題のエッセイを発表した。会員で詩人でもある安水稔和氏の詩「山毛欅林で」（詩集『椿崎や見なんと』収容）を全文引用している。

◇「真澄研究の現状と課題～研究史を交えて」
松山　修氏

秋田県立博物館学芸主事松山修氏（当研究会会員）は青森県文化財保護協会主催の平成十四年度地方史研究発表会（平成十四年十一月実施）で標記の題で講演し、それに加筆補訂の上、青森県文化財保護協会の機関紙に表題の論考を掲載した。「定説の不確かさ～名乗と年齢」「青森県内の遺墨資料、関連資料」「三河の低馬考」「柳田国男の真澄研究の功罪」「真澄研究の展開」などにふれている。

◇「時の旅佐竹氏入部四百一年」

『秋田魁新報』では標題の記事を毎週火曜日に掲載しているが、「農業編⑥―歴史に残る北浦一揆」に大石淳氏（田沢湖町）が登場した。また、「林業編上―藩財政の重要な柱」「鉱業編③―海を渡った阿仁の銅」には伊藤徳治氏（二ツ井町）が登場した。「鉱業編②―院内銀山好況に沸く」には井上隆明氏（顧問・秋田市）、「鉱業編―芸能・食文化栄える」には茶谷十六氏（田沢湖町）がそれぞれ登場した。なお、「鉱業編①―活況呈した鉱山王国」には、真澄の著作『すすきの出湯』が引用されている。

◇「菅江真澄わが先祖、会ったかも」
斎藤忠生氏

秋田県五城目町出身のオペラ歌手斎藤忠生氏は『秋田魁新報』に「鄙の鎮魂歌」を連載中の、その四九に標題の記事を掲載した。国立劇場開場三十周年記念公演「菅江本奥じょうるり―ひなのひとふし・ひなの遊び」に出演した思い出を語り、『鄙の遊び』で真澄が紹介している「馬場目の盆踊り」には先祖も参加し、真澄と会っているのではないかと想像を膨らませている。そして、「計り知れない程の道を歩き続けた健脚の持ち主・日本一の長距離ランナー菅江真澄の功績に拍手を送りたい」と結んでいる。この連載は五〇回で終了した。

◇「秋田よいとこ名物じっぱり史」
長谷川美恵子氏

秋田経済法科大学短期大学部講師の長谷川美恵子氏は標記図書を「秋田ほんこの会」から豆本として発行した。「じっぱり」とは「いっぱい」のこと、秋田の名物・名産を古今の著作の中から市町村ごとに調査したもの。《男鹿の秋風》《雪の秋田根》などが引用されている。

秋田ほんこの会は秋田市新屋割山町三―五二

◇『秋田蕗の里大野のあゆみ』
大野の里あゆみ編集委員会

秋田市仁井田の集落「大野」では標記図書を発行し、その中に「菅江真澄と大野村」という項目をもうけ『月の出羽路河辺郡』『勝地臨毫河辺郡』を引用している。

◇『中世出羽の諸様相』
東北中世考古学会秋田大会実行委員会

東北中世考古学会では毎年東北六県持回りで研究大会を実施しているが、今年は九月二十七、二十八日に秋田市で開催された。それにあわせて資料集『中世出羽の諸様相』が出版された。

その中で「大森町観音寺廃寺跡」（『雪の出羽路平鹿郡』）、「雄勝町館堀城跡」（『雪の出羽路雄勝郡』）、「男鹿市脇本城跡」（『男鹿の秋風』）、「秋田市後城遺跡」（『水の面影』）、「井川町洲崎遺跡」（『軒の山吹』）について、真澄の著作が引用されている。

◇「秋田のぬらりひょん」
山口敏太郎氏

秋田市の有限会社無明舎出版では東北六県に伝承・文書として残る「妖怪」について『とうほく妖怪図鑑』を出版した。その中で真澄の著作『雪の出羽路雄勝郡』の中から現在の稲川町

稲庭沢口の「ぬらりひょん」といういう妖怪を取上げている。価格一、六〇〇円＋税、一般の書店で購入できる。

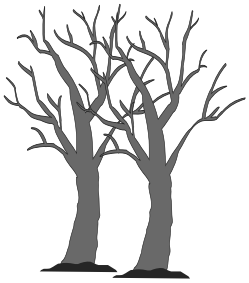
◇「オシラサマの諸相」　齋藤壽胤氏

当研究会理事齋藤壽胤氏（秋田市）は東北芸術工科大学東北文化研究センター（山形市）の『研究紀要』第二号に標記論文を発表した。真澄の著作の中からオシラサマの記録として『雪の出羽路平鹿郡』『月の出羽路仙北郡』『すみかの山』『すすきの出湯』引用紹介している。

◇「田村根子のふるさと」　田口昌樹氏

真澄が現在の大雄村田村で記録した「田村根子」と呼ばれた泥炭について記し、あわせて全国菅江真澄研究集会への参加を呼びかけた。

秋田魁新報文化欄に掲載。



おらほの真澄
―支部活動の報告など―

◇「八英の梅民家の庭に」　伊藤良治氏

文化元年（一八〇四）八月、寒風山に登る途中、男鹿市岩倉で八英の梅を見て、「たれ植えて八の英春はさぞ秋はもみぢの色を見すらん」と詠んでいる（『男鹿の秋風』）。この梅は平成五年に残念ながら枯死してしまった。その後、男鹿市教育委員会では、八英の梅が枯死する前に落果した実から育てていた幼木二本を植樹しその生長を楽しみにしているところである。また、真澄が詠んだ歌は石碑に刻まれている。

天王町天王追分に住む伊藤良治氏（男鹿森林組合勤務）は十五年前の平成元年、男鹿市脇本岩倉にあった八英の梅の落果を自宅に持ち帰り植樹し育てていたところ、今年四月八日に開花し、五月上旬に一つの花に七～八個の実がなった。『毎日新聞』秋田判六月五日号。

◇「モク布団」を展示　天野荘平氏

天王町潟船保存会事務局天野荘平氏（当研究会常任理事）は江戸時代に八郎潟の水藻で作られ、布団などに使用された「モク布団」を若美町の農家から提供を受け、天王町の天王スカイタワー内にある「潟の民俗展示室」に展示して評判をよんでいる。若美町の農家では種籾の保温用に使用されていた。真澄は「モク布団」について『秋田のかりね』『雪の秋田根』の中で紹介している。

◇「秋田市寺町の真澄の足跡を訪ねる」　秋田県立博物館友の会

博物館友の会では標記行事を開催した。真澄の足跡を旭北寺町、旭南二丁目の寺院に求めたもので本誓寺（如是観）、光明寺（石田無得）、大悲寺（鳥屋長秋）、善長寺（高階貞房）、誓願寺（真崎勇助）、應供寺（湛然）を探訪した。案内人は当研究会会員・天野荘平、田口昌樹の両氏。アルバートホテルで昼食後、田口昌樹氏が「菅江真澄と鳥屋長秋」と題して講話を行った。参加者三十名（内当研究会会員十五名）。

◇真澄の足跡を訪ねる　男鹿市教育委員会

男鹿市教育委員会では今年も「真澄の足跡を訪ねる会」を実施、「八英の梅」「八龍神社」「蜘蛛舞」「中石」「入道崎」「加茂青砂」「小浜」などを訪ねた。案内人は小山善愛（男鹿市菅江真澄研究会会長）・天野荘平（同副会長）が務めた。

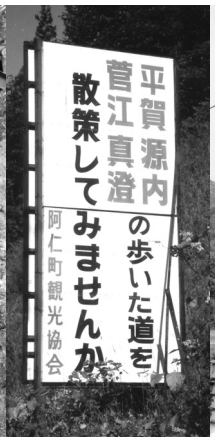
◇文化講演会「真澄の記した物語」野村純一氏

国学院大学文学部教授野村純一氏（当研究会会員）は院友会秋田支部（同窓会）の総会で「真澄の記した物語」―世にはやものがたりといふ―と題して、講演を行い、同窓生、一般聴取者に感銘を与えた。

◇立看板三点　臼別温泉など

最近旅の途中で真澄の名を記した看板三点を発見した。

「臼別温泉」～北海道大成町
この先3・2㎞湯とぴあ臼別
菅江真澄も湯浴の峡谷のいで湯
「国道一〇五号」～秋田県阿仁町
平賀源内・菅江真澄の歩いた道を散策してみませんか。



「小滝霊水の由来」～秋田県森吉町

小滝温泉は神体山である森吉山の伏流水で古来地域の人々が登山の際に手垢離を取った霊験あらたかな泉である。江戸時代この地を訪ねた旅行家民俗学者菅江真澄氏が小滝集落地主新林吉左衛門家に休憩を取ったと伝わる。（以下略）

※真澄は『雪の秋田根』の中に新林某とのみ記している。

こんな愉快な看板や案内板などを発見しましたら写真を添えて編集部にお知らせ下さい。

◇「県南地区菅江真澄の足跡を探訪する会」実施。

当研究会主催の標記探訪会は十月十九日に実施した。会員いがいの人も含めて五十六名が参加し、真澄が記録した六郷・千畑・仙北の湧水群やゆかりの地を探訪した。六郷の観光施設「湧太郎」では、菊地利雄副会長の挨拶のあと、佐藤隆造理事の「真澄翁の肖像画」、田口昌樹副会長の「天明五年の真澄の足跡」の講話があり、高橋茂信理事が「平成十七年度」の「全国菅江真澄研究集会」が山内村で開催予定であることを報告した。当日の案内役を務められた、会員の黒沢三郎・佐藤宗久・清水川修の各位、案内や会計を担当した幹事さんご苦労さんでした。

星山清水にて

◇「真澄日記から藤里滞在を探る」福司　満氏

当研究会主催行事「秋田県県北地区講演会は十月二十六日（日）、藤里町で開催した。講師は藤里町菅江真澄研究会会長福司満氏、演題は「真澄日記から藤里滞在を探る」。真澄の日記『しげき山本』の文章を紹介しながら、現在の藤里を紹介し、日記との相違点にふれ、真澄が知らなかった当時の藤里町についてもふれた。秋田市、能代市などからも多くの会員が参加し、また町内からは一般の人も参加し、聴衆は百名ほどで、盛会裡に終了した。開催にあたられた藤里町教育委員会、藤里町菅江真澄研究会のみなさんありがとうございました。

◇「笠矢の湯再確認」　山本次夫氏

男鹿温泉郷で真澄を前面に出した温泉旅館を経営している山本次夫氏（当研究会会員）は真澄が『男鹿の鈴風』の図絵の中に記録した「笠矢の湯」を湯の尻海岸で再確認した。真澄は「此岨畑を下りて海へたの笠矢といふ處に温泉あれと、潮もひとつにうちあふれひやゝかなりとか」と記しているが、その場所を特定することは出来ないでいたもの。昭和五十年（一九七五）頃、当時秋田県衛生科学研究所所長であった児玉栄一郎（故人）が発見し、「（笠矢の湯は）草木原の湯、つまりいまの男鹿温泉や石山温泉の北で、丘が海に尽きる海触断崖の真下で、黒崎にも近いが、また湯の尻のすぐそばで周辺に小石が多い」と「真澄と秋田の温泉」（菅江真澄百五十年祭実行委員会編『菅江真澄と秋田』に収載）に記されているだけであった。山本氏は渚を克明に調査し、素手で砂地に手をふれ、お湯が滲んでいる箇所を発見し、鶴嘴とスコップで掘ってみたところ三十三度の温泉が涌いていることを確認した。山本氏は男鹿温泉の財産として、最近、若い人たちの間で流行している「足湯」（ベンチや石垣に座って足だけを温泉に浸して入浴する施設）を設置し、活用すべく関係者と話合いを進めたい意向である。足湯予定地からは北に白神山地、東に森吉山、西には黒崎海岸を望む景勝の地である。

標柱の右下から自噴している

◇桃源郷祭手這坂活用研究会

真澄が日記『おがらの滝』の中に文と図絵で桃源郷として取り上げた手這坂（峰浜村）で十一月二日、「秋の桃源郷祭」が開かれ、民謡、郷土芸能、レコードコンサートなどが開かれた。地元産の朝取り野菜や加工品の販売、蕎麦打ち体験、手這坂で収穫した米による餅搗きなども行われた。田口昌樹氏が真澄の扮装？で登場し、「菅江真澄の旅と人生」と題し講演した。のべ千人ほどの人が集まった。

◇男鹿市菅江真澄研究集会開催

男鹿市菅江真澄研究会

男鹿市菅江真澄研究集会が十一月二十二日に開催された。林嘉武さんが「第十六回全国菅江真澄研究集会（大雄村大会）に参加して」と題して七月に行われた研究集会の概要を報告し、船木真之さんが「男鹿南磯に菅江真澄を偲ぶ」として真澄の足跡と自身の体験を重ねて研究発表をした。なお、当研究会からは高橋常任理事が出席し亀井会長の挨拶を代読した。参加者約四十人。

総会の報告

平成十五年度の総会は七月十九日（土）、古四王神社社務所（研究会事務局）で二十七名の参加を得て開催された。提出議案はすべて全会一致で可決された。

可決された議案は別冊に掲載しておりますので、ご確認下さい。

総会終了後、真澄翁の墓前に参拝したあと、研究発表に移り、清水英明氏（秋田市）が「真澄が選んだ久保田十景」と題し、真澄の著作『久保田十景』（豊橋市横田正吾氏所蔵）の写真と現地を訪ねて本人が撮影した写真を示しながら解説、その印象などを発表した。

総会の出席者

総会出席者田口大師（湯沢市）、佐々木周一郎・高橋茂信（山内村）、佐藤隆造（仙北町）秋山正信・小笹鉄文・大場与志美・亀井宥三・菊地利雄・近藤昌一郎・佐藤宗久・佐藤春雄・清水英明・清水川修・高橋英男・田口昌樹・中野稔・林嘉武・北條邦夫・山口宣義・山田實（秋田市）、安藤松治郎（男鹿市）、新野建臣（飯田川町）、床田昭治（琴丘町）、伊藤徳治（二ツ井町）、山田博康（阿仁町）、福岡龍太郎（合川町）の各氏（敬称略）

お悔やみ申し上げます

故　鷲尾　厚氏

秋田市千秋矢留町七―十六
平成十五年六月二十二日享年八十二歳
ご家族妻ユキさん

鷲尾さんは、研究会設立以来の会員でした。研究会設立以前の昭和五十三年（一九七八）九月に行われた「菅江真澄翁百五十年祭」が実施されたおり、その記念誌『菅江真澄と秋田』（加賀谷書店発行）に「真澄の万葉仮名について」―附真澄造字説・画賛―という論文を発表されております。秋田近世史研究者として知られ、叢園賞、県芸術選奨、秋田県文化功労者賞表彰などを受賞。

故　長岐喜代次氏

秋田市手形字西谷地九三―一
平成十五年九月十九日享年九十一歳
喪主長男紘一さん

長岐さんは、研究会発足の翌年に入会され、理事をへて、病気入院されてからは顧問として、当研究会の発展にご尽力いただきました。『菅江眞澄研究』には「菅江眞澄と恐山および両親への情懐」（三一号）、「菅江眞澄と徐福の史跡」（四一号）をご寄稿いただきました。また、『菅江眞澄全集』第四巻（未来社）の月報に「森林官からみた菅江眞澄」、前記『菅江眞澄と秋田』にも「眞澄と杣子たち」を掲載しておられます。

刊後録

◇会誌『菅江真澄研究』の原稿募集しております。「菅江真澄研究投稿規程」により随時事務局にお届け下さい。採用・不採用は編集会議にて協議させていただきます。

◇会誌五十一号をお届けします。

良いお年をお迎え下さい。

（田口昌樹）